石神遺跡の調査（飛鳥藤原第140次）

今冬はとても寒いです。朝、調査現場に行くと土や道具が凍っていることや、横なぐりの雪に驚くこともあります。その中で調査を進めています。

さて、石神遺跡の継続的な発掘調査も18回目をむかえました。今回の調査区は2004年の調査区の北側で、面積は約625㎡です。周辺の過去の調査では南北方向の溝や池状の遺構が並び、遺構内からは具注暦木簡をはじめ多くの木簡、木製品、土器等の遺物が出土しました。また、遺跡の北側を画する阿倍山田道がどこを通っているのか、ということについてもその確認が課題となっています。

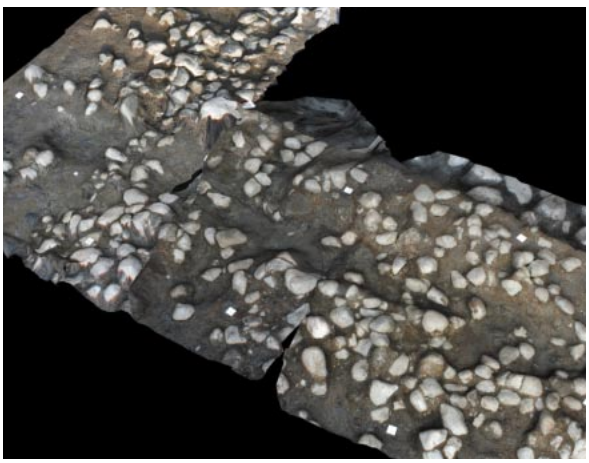
年が明けて、７世紀の遺構の発掘にとりかかりました。これまでに木器、木製品、獣骨といった遺物も出土しています。しかし、まだまだ調査はこれから。今回はどのような成果があがるのでしょうか。

ところで、飛鳥といえば、不思議な石造物をはじめ、多量の石が使われた施設があります。遺構が複雑に重なり合っている状況もしばしばみられます。

今回も礫が集中している部分の下層に、溝がありました。礫を取り去らなくては、溝の調査ができません。そこで、慎重に記録を作成し、極力保存を図りつつ、調査をしていくことになります。この記録が発掘調査に重要なものであることはいうまでもありません。調査で消失、あるいは改変されてしまう遺構であればなおさらです。

調査現場では、どうしたらより多くの遺跡を考える情報を記録し、活用していけるのか、試行錯誤を続けています。一例としてデジタル写真による遺構計測の画像をお見せします。このような実験と検討の繰り返しも、発掘調査の面白さの一つです。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　金田 明大）



デジタル記録された礫の集中（斜めから）

藤原宮朝堂院東地区の調査（飛鳥藤原第138-3次）

農業用水路改修にともない、橿原市の委託を受けておこなった調査です。2006年１月11日から始めました。調査区は朝堂院地区の東約60mの地点。朝堂院東第二・三堂、朝堂院回廊、朝堂院東門に平行する、南北150mにわたるトレンチです。しかしその幅は、東西２m程しかありません。そのなかで藤原宮に関連する遺構として、柱穴、先行条坊、石組溝などを検出しました。

柱穴は、柱を据えるために掘られた穴です。掘形が１mを超えるものだけでも14基以上みつかっています。直径30cm程の柱が残っているものもありました。数棟の掘立柱建物に復原できそうですが、調査区の狭さのため、建物の全容がわかるものはありません。

先行条坊は宮内の諸施設の建設に先立ち、東西南北に設定された道路とその側溝です。五条条間路の北側溝とみられる溝がみつかりました。

石組溝は東西方向に人頭大の石を３段に積んだ、比較的手の込んだつくりです。底にはやや小さい丸い石を並べています。溝幅は50cm、深さ45cm程。排水施設として機能していたようです。

今回の調査区周辺は本格的な発掘がおこなわれておらず、様相が皆目わからない地区です。その一端を知ることができたのが今回の大きな成果です。官衙施設の遺構と考えられますが、平安宮では、このあたりは太政官や民部省といった重要官衙が占めています。ただし今回の成果の全容を知るには、周辺の調査を待たなければなりません。調査区の長さと幅の狭さに苦労させられましたが、今後に向けての展望が大きく広がりそうな発掘でした。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　加藤 雅士）

柱根（左上）と石組溝